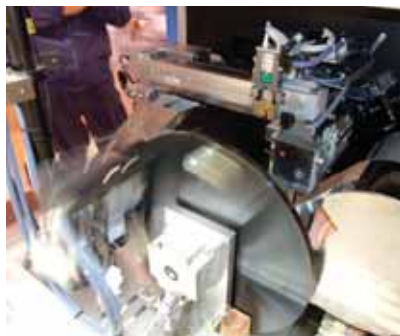


筆ペン穂先のシェアは全国NO.1 技術を磨き続ける多孔性樹脂メーカー



理研化学工業株式会社

発明した「筆ペン」穂先が大ヒット

多孔性樹脂メーカーとして数々の技術を保有する理研化学工業。ポリウレタン樹脂に炭酸カルシウム等を混ぜ込み、成型後に塩酸に1週間浸すとカルシウムが溶け出して、ミクロン単位の微細な穴が空いたスポンジ状の樹脂ができる。この多孔質化における抽出技術で全国をリードしているのだ。

先代社長の大月昇氏がこの技術を利用して開発したのが、今や全国の文房具店等に並んでいる「筆ペン」の穂先（ペン先）である。「先代が筆ペンを考案したのが昭和50年のこと。毛筆特有の『とめ』や『はね』の動きも再現できたことから、毛筆を愛用していた人にも大ヒットしました。最盛期の1990年代には、年間2千万個以上の穂先を出荷したこともありましたね」と話すのは2代目の大月迪雄社長。

孔に、毛細管現象でインクが染み込むのだが、孔が大きすぎても小さすぎてもインクはうまくしみ出ない。1mmから30mmの孔を複数連ねて、適量のインクを染みこませるのが同社のオンリーワン技術だ。今も国内で生産される9割以上の筆ペンに、同社の製品が使用されている。

新領域への積極的な技術転用

近年、筆ペンの需要は横ばい傾向にある。パソコンやプリンタの普及により、一定の役割を終えた感も否めない。そのため同社では、以前からこの技術の新領域への応用を模索してきた。

その先駆けとなったのが、1990年代に開発した化粧品のアイライナーである。筆ペンの使い勝手の良さを応用したのだ。最近では、アニメのセル画に使う油性顔料インキのペン先等も、商品化が実現しつつある。

「液体の粘度や粒子の大きさを考慮し、液体をたつぷり出すのか、逆に液を吸い取るほうが良いのか、用途に応じて気孔径を細かく調節できるのが、当社の強みです」と大月社長。平成元年からは、研究開発部を別会社に設置し、新たな顔料やインキの開発にも当たっている。

このような高い開発力以外にも、同社がオンリーワン技術を維持し続けている理由がある。それは、人間の力。ミクロン単位の作業となる成型や検査過程には、今も人の手や目が欠かせない。職人たちが、白い筒に過ぎない柔らかな樹脂を研磨機に当て、ペン先の繊細なカーブを描き

出していく。検査工程では、わずかな形のズレや小さな欠けを、熟練の検査工が一つずつ精査する。一部工程こそ機械化されているが、繊細な商品にはやはり手作業が不可欠である。

製品のリサイクル率の向上や、産学連携による新技術の開発にも乗り出す同社。今も昔も、蓄積された技術を新たな領域へ活かし続ける姿勢を、決して崩すことはない。

主な事業内容

合成樹脂を用いた印材、多孔性樹脂の製造・販売等



大月迪雄さん
代表取締役

理研化学工業株式会社

Company Profile

住所 / 〒573-0136
大阪府枚方市春日西町2-25-28
枚方工業団地
創業 / 昭和45年
設立 / 昭和47年9月
資本金 / 2,000万円
従業員 / 9名 (平成21年1月現在)
TEL / 072-858-5771
FAX / 072-858-5774

大阪20

<http://www.riken-chem.co.jp/>